

シヨールペンハウエル「恋愛の形而上学」の研究（下ノ下）（註二）

石 塚 勝 雄

二 二 二 （註三）

本節では先ず遂げられた恋に伴って当事者が不幸となる場合の種々相を挙げて説明する。シヨールペンハウエルによれば、恋愛は種族の幸福のためのものであるから、それが恋愛当事者の個人的幸福と衝突する場合の多々あり得ることは、当然考えられることである。不幸の第一は、恋愛激情の要求するところが当事者の個人的幸福と衝突する場合であり、次の如く述べられる。

『しかし、遂げられない恋だけがおりおり悲劇的な結末となるのではなくて、遂げられた恋も、幸福へ導くよりは不幸へ導く場合の方が多いのである。そのわけは、この激情の要求するところがしばしば当事者の個人的幸福と甚しく衝突し、これを転覆するからである。というのは、この要求が恋愛以外の事情と一致せず、それらの事情の上に建てられた生活の計画を破壊するからなのである。』

以上は表現が抽象で曖昧であるが、情事的な事柄が、その人の職業・趣味・思想などの進歩向上に対してマイナス的作用を及ぼすことを指すのであろう。つぎは、恋愛当事者の個性が相互に適応しないことから来る不幸で、その理由はつぎの通り説明される。

『というのは、恋愛の相手が、性的関係をはなれて見ると、恋する人にとって憎らしく・賤しむべく・嫌悪すべき

者となることがあるからである。しかし、種族の意志は個人の意志よりもはるかに強力であるから、恋する当人は自分の忌み嫌う性質に対しても眼をつぶるようになり、すべてを見逃し、すべてを見そなうて、自分の恋情の相手と永久に結合することとなるのである。恋の妄想はこのように人を盲目にするものであるが、種族の意志が遂げられるとすぐに、この妄想は消滅して、その人の手許に忌^{しま}しい一生の道連れを残して去る。われらはしばしば、非常に理性的で優秀な男子が、がみがみや魔性の女と結婚^{しよ}しているのを見て、どうしてあんな女を選んだのかと不思議に思うことがあるが、それは上述のことから直ぐに説明がつく。それ故に古代人は愛の神 (Amor) を盲目として表わした。』

恋愛の激情が充たされたとき、当事者の個性とか趣味とか人生観とかの不適合が表面に浮び出て、当事者の不幸をもたらすという社会事実は広く承認されているようであるが、その根拠について形而上学者としてのシヨールペンハウエルは以上の通り説明した。その社会事実は案外広いようで、先ず「惚^ほれた腫^はれたは当座のうち」とか「女房の不作は一生の不作」とか「結婚はくじ引きである」とかの言草に現われている。「糟糠之妻不下堂」という教訓が昔日の支那にあったことは、糟糠の妻が捨てられたという広汎な社会事実があったことを物語るものと言えよう。文化が発達して結婚生活における文化的要素が重視される場合は、どうしても離婚が多くなってくるのもこれであろう。女房の地金がむき出しになって「山の神」^(註四)的存在となりながらも、なお夫婦生活が続けられて行く事例はよく見かけるのだが、その典型がソクラテスであることはすでに述べた。^(註五)

さらに進んで、恋に陥った男は、婚約の女の気質や性格に我慢の出来ない欠点があって、これが将来自分の一生涯を悩ますであろうことを事前に明らかに知り、痛感しながらも、恐れて退くことをしない場合があるとして、それを詩人の口をかりてつぎの通り傍証する。

お前の心に罪が潜んでいようと、

私はそれを尋ねもせず、気にもかけない。

お前がどんな人間であろうとも、

私にはお前が可愛ゆくてならない。

I ask not, I care not,

If guilt's in thy heart;

I know that I love thee,

Whatever thou art.

以上のように自己犠牲を承知の上でも、恋の淵に飛び込んで行くわけは、恋人の求めているものが根本においては自分のことではなくて、将来に生まるべき第三者のことだから、とシヨーパーンハウエルは説明する。そこから一寸道草を喰って、ここでもまた恋愛の偉大性と詩の対象になる所以をつぎのように述べる。

『この自分のことでないものを求める心は、どんな場合でも偉大といふことの刻印なのであって、激情的な恋愛にも崇高な色彩を与え、それを詩の貴重な題材とするのである。』

最後は、相手に対する恋愛と極端な憎悪とが両立し、併存する場合である。プラトンが「羊に対する狼の恋」と喩えたのが、これであると言う。シヨーパーンハウエルによればそれは、どんなに口説いても、懇願しても相手が絶対に聴き入れない時に起きるといふ。——日本語の「肘鉄(砲)」は、この場合の残酷性を最もよく象徴すると思う。——そして彼は例の如く他人の口をかりて、自説の真理性を傍証する。

彼女は可愛ゆくもあり、憎くくもある。

I love and hate her.

シヨークスピア『シンベリン』(Cymbeline) 三の五。

つぎに、このようにして燃え上った恋する女に対する憎しみが、時には彼女を殺させ、つづいて自分をも殺すに

たる新聞記事を指摘して、実証面からも自説を確認している。さらにその深刻な心理的様相をゲーテの詩句をかりて、つぎの通り描写する。

すべての拒まれた恋にかけて！ 地獄の火にかけて！

私は呪い得んがために、もっとひどいものを知りたいのだが！

Bei aller verschmähten Liebe! beim höllischen Elemente!

Ich wollt, ich wüßte was ärger's, dab ich's fuchen könnte!

この詩句が引き抜かれたゲーテの詩は不明であり、前後の關係も明らかではないが、要するに、捨てられた恋よりも、地獄の火よりも兇悪なものを知って、それを呪うことによって、失恋の苦悩から解放されたい、の意であろう。

つぎは失恋の悲痛である。その形而上の本質が、個人の口から吐かれる種族の守神の溜息ためいきであることはすでに述べた。(註七) また、現実には恋人が競争者に取られたり、死んだりした場合の失恋の悲痛についてもすでに述べた。(註七) ここは、肘鉄を喰らった場合の悲痛で、それは残酷そのものであり、失恋の中でも最も深刻味を帯びており、その凄惨な様相を彼はつぎのように述べている。

『恋する男が、恋人の冷酷な態度やこちらの苦悩を楽しんでる彼女の虚栄の喜びを、「残グロウゼームカイト」と呼ぶのは、実際には決して誇張ではない。(中略) 恋の熱望が充たされなかつたために、それを鎖の如く、また鉄の足枷あしがせの如く、その生涯を通して引きずって歩かなければならず、寂しい森の中でいくたびか歎息をもらした人は、決してペトルカ(註八)一人だけではなく幾人もあったのである。』

つぎは、この苦悩の体験と、それを言い表わす詩才の問題に移り、この両者を兼ね備えた人はペトルカ唯一一人であったと言ひ、ゲーテのつぎの美しい詩句はペトルカによく当てはまると述べている。

人がその悩みのために、もだす時、

神はわが悩みを語るべき力を、われに賜いぬ。

Und wenn der Mensch in seiner Qual verstimmt,

Gab mir ein Gott, zu sagen, wie ich leide.

天賦の詩才によって自分の苦惱の「はげ口」を見出すことは、苦惱の緩和策であり、その詩才は恩恵として神から賜わるものなのである。そう言えば、深刻・哀傷・凄惨なものの表現は韻文に限るらしく、日本にも数々の優れた失恋歌が生れたようである。^(註九)

なお「失恋」という用語はシューペンハウエルが用いているのではなく、筆者が便宜上用いたものである。ところが、日本語の「失恋」は言うまでもなく結婚(同棲)を失ったという意味である。しかし、結婚すれば結婚の前段階である恋愛は失われるのであって、「結婚は恋愛の墓場なり」とか「恋の味は失恋の中にある」とかはこの意味である。つまり、結婚しないということは、恋がつづくことであり、この意味において結婚しないことを失恋というのは適切ではない。そこで、日本語の「失恋」とは「失婚恋」の省略形と見るか、または結婚しないことによつて恋までも失われてしまうような、恋愛の名に値しない平凡な恋について言っているのだと解する外はあるまい。

(註一) 本論集、第七卷、第二号、拙稿につづく。

(註二) Eduard Grisebach, Schopenhauers Sämmtliche Werke, (Reclam) Bd. II, S. 1353 ff.

(註三) 恋愛と当事者の個人的幸福と衝突する不似合な結婚の成立については、異性選択の箇所ですでに述べた。(本論集、第七卷、第一号、三四頁、十五)

(註四) 「山の神」の語源については、榎垣実『語源 猫も杓子も』一三頁以下にある。

(註五) 本論集、第七卷、第一号、三七頁。

(註六) 同上、第二号、二三頁。

(註七) 同上、二七頁。

(註八) ペトラルカの愛の苦悩の根源については、同上、二四頁。

(註九) 例えば『百人一首』によって広く知られた、つぎのようながある。

今はただ思ひ絶えなむとばかりを 人伝てならで言ふよしもがな

あらざらむこの世の外の思ひ出に 今一度の逢ふこともがな

調べてみると、この二つとも前に関係があつた異性に対するもので、純粹の失恋とは言えないかも知れない。歌論上でも秀歌とされ、特に後者の如きは「声調朗々として愛吟に耐ゆ」とされているが、恋愛論上注意すべき点は、前者は男性によつて後者は女性によつて詠まれたということ、分りきつたことではあるが歌人自身の体験の告白だということである。

二一三 (註)

本節は、種族の守神すなわち恋愛の神（その人格化されたクピドー）の本質を述べる。その内容は以上のシヨリーペンハウエルの恋愛論の繰り返し、特に前節の繰り返しであり、ただ種族の守神の側からの敘述が展開されているだけで、別に論議するところもないので、彼の敘述をそのまま左に掲げることとする。

『實際、種族の守神は個人の守神といたるところで鬭争し、個人の守神の迫害者であり、仇敵であつて、自分の目的を貫徹するために、個人の幸福を容赦なく破壊しようと、何時でも用意しているのである。そのうえ、国民全体の幸福すら種族の守神の気まぐれの犠牲となつたことがある。この種の実例を、シェークスピアはその作『ヘンリー六世』の第三部第三幕第二場と第三場で見せる。これというのもつまり、われらの本質の根本は種族のうちにあるから、個人よりも種族の方が、より手近に・より早くわれらを動かす権利を持つもので、そのために種族に関

する事件が優先するからである。この消息を感じて、古代の人々は種族の神をクピドーに人格化した。このクピドーは幼童のような顔つきをしていながら、敵意ある・残酷な・そのために評判の悪い神であり、また、我が儘で専制的な鬼神であるけれど、それでも神々と人類との支配者である。すなわち、

汝、神々と人々との暴君なるエロスよ！

σὺ δ' ὦ θεῶν τυράννε κ' αὐθάρτου, Ἔρως!

(Tu, deorum hominumque tyranne, Amor!)

人を射殺す弓矢、盲目、翼、これらがクピドーの附き物である。最後のものすなわち翼は恋の無常を示している。この無常は通常、恋が充たされた後につづく幻滅感とともにやって来る。』

外界を重視する現代の風潮に較べて、内界を指向した古代人においては、恋愛の体験も失恋の体験もはるかに高度・深刻であり、それを支配する形而上的実体に対する洞察も透徹したものがあつたと言えよう。それが日本でも優れた恋歌を生み、西洋でも、今日私たちが何気なしに見るキューピッドに象徴化されていることに注意したい。

(註) Edward Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1355.

二一四 (註)

本節は、恋愛から結婚へと辿りついた時に当事者が味わう幻滅感・欺瞞性について述べる。すでに度々述べられたことの繰り返しではあるが、これがショーペンハウエルの恋愛論の主題なのであり、音楽におけるように主題が繰り返されて、彼の恋愛論の本論は一応ここで終結する。別に新しい論理もないが、味読すべき文章であると思うので左に掲げる。

『恋愛の激情はある妄想に基づいて生ずるが、この妄想は種族に対してのみ価値あるものを個人に対して価値あるものと見せつけるものであるから、種族の目的が達成された後には、その欺瞞も必然的に消失する。今まで個人を占領していた種族の靈は、今度は個人を見放す。個人は種族の靈から見棄てられて、元の狭小で貧弱な個人に戻って来るのであるが、過去を顧りみて、あの気高い・英雄的な・無限の努力をした後で、彼の享樂に与えられたものは、普通の性欲満足が与える以外の何物でもなかったことを知って、いぶかり驚ろくであろう。予期に反して、個人そのものは以前よりも幸福になっていないのである。すなわち自分は種族の靈にだまされていたのだと気がつく。それ故に、幸福にしまったテセウスは、そのアリアドネを棄てるのが世の常である。ペトラルカの激情が満足されたとしたら、卵を産んだ後に鳥の歌が止むように、彼の歌もその刹那から止んだであろう。』

(註一) Eduard Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1355 ff.

(註二) (註三) Thesens, Ariadne. 二人ともギリシヤ神話上の人物。テセウスはアッティカの王子で、ミノス王の娘アリアドネの愛を得、彼女に助けられて怪牛ミノタウロスを退治し、彼女と共に帰国の途中、ディア島に彼女を捨てて去った。

二一五 (註一)

前節までで彼の恋愛論の本論は終わり、本節以後は「あとがき」とも言うべき部分である。その第一である本節は、恋愛に対する理性的考察によって得られた真理が、——つまり以上述べた彼の恋愛の形而上学が、恋愛の激情を征服し得るかの問題であり、つぎのように述べられている。

『私の「恋愛の形而上学」は、今現にこの激情に巻き込まれている人々には、どんなに気に入らなかつとも、一般に理性的考察なるものがこの激情に対して何かあることをなし得るものだとするならば、私が発見した上述の

根本真理は、何よりもまず、この激情を征服すべき筈であるということ、序でに言っておく。しかし、昔の喜劇作家のつぎの言葉は多分本当であろう。

何事でも、それ自らにおいて処理されず、それ自らの中に何等かの方法を持たない限り、他より勧告で支配することは出来ない。

Quae res in se neque consilium, neque modum habet ullum, eam consilio regere non potes. (註1)

以上は単に恋愛だけの問題ではなく、広く人間理性の限界の問題であると言えよう。つまり、人間の理性は形而上の実体からの支配力(作用)を征服し得るかの問題である。さらに言うならば、現代は個人の自主性が高調される時代ではあるが、それはあくまで、対人関係・对社会関係での事柄であり、ここは内的に人間は自主的であり得るかの問題である。彼は後述の「あとがき」の第三で、その可能を説き、その境地を仏教哲学の用語をかりて「涅槃ねはん」と称しており、これは結局いわゆる人間の「救い」の問題となってくるのであるが、彼はここでは結論を与えないまま、読者を特に目下恋愛中の読者を喜劇作家の口をかりて、皮肉にからかって終っている。しかし、このような冷笑的態度が彼の身上しんじょうではなく、彼の哲学全体がわれわれ人間の激情・魔性を征服し、沈静させるための教育書と見ることもできるのである。厭世観にしても厭世がマイナスになるのではなく、厭世観からくる特有の心の落ち着きが人の心を慰さめ、人の心を魅するのだと言えよう。

(註1) Eduard Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1356.

(註2) 紀元前一世紀のローマの喜劇詩人テレンティウス(Terentius)の言葉。

二十六 (註1)

本節は「あとがき」の第二で、世間にある結婚の種々相とそれぞれの幸・不幸とそれぞれの理由とを論じている。恋愛論そのものの新しい展開は見られないのであるが、現実の結婚の種々相という観点からの叙述であるために、こ

れから結婚しようとする人たちにとっては参考となることが多いと思われるので、筆者が適宜項目別にして述べることにする。

先ず恋愛結婚は大概不幸な終末を告げる理由で、つぎのように述べられている。

『恋愛結婚は種族の利益のために行われたもので、個人のために行われたものではない。勿論、当事者二人は自分たちの幸福を進めるのだと妄想している。しかし、その真の目的は、彼等二人によってのみ生まれ得べき新個体の産出にあるので、彼等自身の見知らぬものである。この目的によって結びつけられて、彼等はその後互いに来るだけ睦ましくして行こうと努める。しかし、激情的恋愛の本質である本能的妄想によって結びつけられた夫婦は、その他の点では、全く異種的な性質を帯びている場合が甚だ多いのである。これは、やがて消失すべき運命にある妄想が実際に消失したときに、はっきりと現われる。それ故、恋愛結婚は不幸に終わるのが普通である。それといふのも、そうした結婚は現代の人々を犠牲として未来の世代のために配慮するものだからである。スペインの諺も言っている、「恋愛で結婚するものは、苦悩のうちに生活しなければならぬ。」と。』

つぎは恋愛結婚と反対の結婚である。日本流に言えば「媒妁結婚」の範疇に属するであろうが、シヨーペンハウエ^{コンフエニェツ}ルは便宜から結ばれた結婚（大概是両親の選択による）と言っており、それについてはつぎのように述べている。

『この場合の支配的な顧慮条件は、それがどんな種類のものであろうと、少なくとも現実的であり、決して自然に消失するようなものではない。これは現存当事者の幸福を目標としたものではあるが、次の世代にとっては明らかに不利益である。しかも現存当事者の幸福ということも疑問なのだ。』

つぎは、便宜^{シフエニェツ}による結婚が目標とする当事者の幸福なるものの批判に移って、つぎのように述べられている。

『結婚するに当って、自分の好みを満足させることよりも金銭に目を呉れるような男は、種族のために生きないで個人として生きていたのであって、これは真理^{ワールハイ}に正反対なことなので、自然に反したこととなり、ある種の軽蔑

を呼び起こすのである。両親の勧めに反対して、金持で老人というほどでもない男の求婚を拒絶し、一切の便宜上の顧慮をしりぞけて、ただ自分の本能的な好みによって相手を選ぶ娘は、種族の幸福のために自分の個人的幸福を犠牲にするものである。さて、正にその理由で、この娘に対して世人はある種の賞讃を与えないわけには行かないのであって、この娘は一層重要な方を選んで、自然の(むしろ種族の)感覚で行動したのに反し、両親は個人的な我欲主義から勧めたのである。』

以上のように、「便宜結婚」も当事者の幸福を目標としたものなのではあるが、それは世俗的福利を得ても、精神的高貴性を欠くが故に、結局幸福ではないということになる。つぎは、それでは恋愛と便宜とを「両手に花」式には行かないのかの問題に移ってつぎのように述べられる。

『以上のことから考えると、結婚を取り結ぶにあたって、個人か種族かどちらか一方が損をしなければならぬかのように見える。大概は事実その通りであって、便宜と激情的な恋愛とが手を携えることは極めて偶然の幸運なのである。』

つぎは一寸道草を喰って、人間一人一人が隣れむべき状態にあることの一原因としての両親の結婚関係に論及してつぎのように述べられている。

『人間の大多数は肉体的・道徳的・知力的に隣れむべき状態にあるのであるが、その原因のある部分は、結婚が通常、純粋な選択や好愛によらないで、あらゆる外面的な顧慮や偶然の事情で結ばれていることにあるのである。』

右の叙述を科学的に言えば、恋愛結婚は優生学的に望ましい、ということになるであろう。偉大な母性主義者エレン・ケー(Ellen Key)が人類進化の立場から恋愛結婚を唱えたのも、この理論の上に立っていたことを想起する必要がある。同様の思想は、動物の生態について詳細な研究をしたドイツの動物学者ブレーム(Brehm, 1829—84)のつぎの著名な言葉にも現われている、「真に純なる結婚はただ鳥類の間のみ見出される」。これは反面から見れ

ば、文化を編み出し文化によって毒された人間の結婚の暗黒面を物語るものと言えよう。

つぎに、結婚の大部分は不幸なものであることの大原則を、彼の形而学の立場から宣言的に述べる。

『幸福な結婚が稀れであることは誰しも知っていることだが、これは、結婚の主要目的が現在の人々のためではなく、次の世代のためにあるからであり、ここに結婚の本質があるからである。』

つぎは、恋愛で結ばれて後に真の友情が発生し、本当に幸福・円満な夫婦生活を完うする場合があることを述べ、その事情についてつぎのように説明している。

『しかし、やさしくて相愛している恋人たちへの慰さめとして付記しておくのだが、激情的恋愛に、全く別の源泉から出る感情、すなわち氣立てが合うことに基づく真の友情フロイントシャットが加わって来ることが往々あるということである。

しかし、この友情は本来の恋愛が満足されて消失した時に初めて現われるのが普通であり、大概はつぎのような事情から生れる。すなわち、相互に補完し相適する肉体的・道徳的・知力的特質が、二人の間に生まるべきものとの関連において、恋愛を発生させたのであったが、それらがこの二人だけに限してもまた、相対立する氣質的特性や精神的優秀として、互に補完する関係を持ち、これによって心情ゲミューントの調和が基礎づけられるということである。』

日本で「夫婦愛」と言われるものが、これを指すのかも知れない。俗に「似たもの夫婦」と言うが、これは一般に右の友情が発生した好ましいのを指すのではなく、夫婦間の相剋・摩擦による精力の損耗に耐えられないで、半ば無意識に、片方が他方に妥協したか、両方が歩み寄りたかの産物であろう。

本節のシーペンハウエルの敘述を結婚の幸・不幸の観点から見て、それを決定する諸要素を抽出するならば次の如くなるであろう。

一、恋愛激情の關係

二、双方の性質や性格の關係

三、世俗的福利（財産・地位・名譽など）の關係

四、恋愛とは別の源泉から發生する友情關係

右の四つの要素は常識的にも言われていることで、格別目新しいものではない。現実には、これらの諸要素はその程度・態様が千差万別であり、その結合關係も錯雜にからみあつて、微妙な絢をなしているわけである。——例えば双方反對の關係にあるものが、相剋する場合もあれば、補完し合う場合もあるというように。これらの諸要素のものとのからみ合いの關係の背後に一々理窟を付けるのが哲学なのであり、特に彼の哲学は、こうした市民社会的素材を豊富に取り挙げていることがその一つの特徴であり、これが彼の哲学を市民階級にも親しみ易いものとし、その関心と共鳴を呼ぶに至つたのである。

(註一) Eduard Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1356 ff.

(註二) 媒妁結婚の本質は、双方の家の財産・社会的地位・身分・家柄などの平衡關係に重点がおかれることである。平衡關係を失つた状態の象徴化が「提灯と釣鐘」であり、「釣合わぬは不縁のもと」とされた。

二 十七

(註一)

本節は「あとがき」の第三で、以上の彼の恋愛論と彼の形而上学一般との関連についての敘述である。これまでも「生きんとする意志」とか「物自体」とかの形而上学的理念を持ち出して、断片的にはこの問題に觸れて来たのであるが、ここでは正面からそれを取り挙げて論じている。つづいて彼の哲学における「人間の救い」の問題に論及しているが、これは単なる道草ではなく、「救い」と「恋愛」との關係を説く次節への布石と見るべきであろう。

彼はまず、以上の自分の恋愛論の骨子をつぎのように要約した。

「人間の性欲の満足にあたって、無数の段階を経て最後には激情的な恋愛にまで昇って行く用意周到な異性選択が

行われるのは、人間が来たるべき世代の人々の特別な個性的構成に極度に真面目な参与をすることに依存するのである。』

つぎに彼によれば、この並外れて顕著な参与が、この「恋愛の形而上学」に先き立つ諸章で述べた・つぎの二つの真理を確証するという。その真理の第一は「人間の本体それ自体は不滅のものであって、それはつぎの時代の種族のうちにも永存する。」ということである。この真理を証明するものが、彼によれば、要するに前述の「参与」の諸々の様相なのである。それは前述のように一言で云えば「極度に真面目」であり、「並外れて顕著」であり、さらにここで述べるように「あのように活潑であり熱心であり」・「反省と企画とから生れたのではなくて、われらの本質の最も内奥の特質と衝動から生れたもの」なのである。『もし人間が全く死滅するものであり、現存の人間とは事実全く別の種族が時間的に後続するだけであるなら、こうした参与があのように滅ぼしがたい状態で現存したり、あのような威力を人間に及ぼすわけがない。』と彼は述べているが、要約すれば、来るべき世代の構成のために、あのようにさまざまの参与をすることが、人間の本質の不滅性を指向する、というのであろう。

そのすさまじい参与が証明する第二の真理は『人間の本質それ自体は、個人によりも種族の方により多く存在すること』である。それを実証する参与の様相を要約すれば、すでに度々述べたように、いざという場合人間は一身上の一切の利害を捨てて恋愛へと馳せ参ずることなのだが、彼のつぎの表現に聴くことにする。

『種族の特殊な構成についての関心は、最も軽い好愛から最も真剣な激情に至るまでの一切の恋愛事件の根源をなしているもののだが、この関心こそ何人にとっても本来的に最高の事件であって、恋愛事件の成否は最も鋭敏に感情に触れる。だからこれは特に「情事」と呼ばれる。この関心が強く決然と現われてくると、単に自分自身だけについての関心は後廻しにされ、必要な場合には犠牲にされてしまう。そこで、人間はこのことによって、個人よりも種族の方が自分にとって大切であり、自分は個人においてよりも一層直接に種族の中に生きるものである

ことを実証するのである。そこで、恋する男が全く自分を捨てて、選んだ相手の眼付きをうかがい、どんな犠牲でも彼の女のために捧げようとするのは、一体何故であろうか。それは、彼の女を求めているのは彼の中の不滅の部分であり、その他のすべてのもの（財産、名著、享樂）を求めずは常に彼の死滅する部分にすぎないからなのである。——ある特定の女に向けられた活潑な又は熱烈な欲望は、われらの本質の核の不滅性とそれが種族の中に永存することの直接の保証である。』

以下は彼の形而上学一般への接属であり、幾分難解でもある。彼はまず前段にすぐつづけて、「人類の本質のこのような永存を何かつまらぬもの、不満足なものと考えるのは、一つの錯誤である。』と述べる。つぎに、この錯誤が生まれるわけは、種族の永存ということとわれらと同じような子孫が将来の時代に生存することだけと考えたり、又は種族の外貌だけを見て、種族の内奥の本質を考察しないことから来ると、彼は述べる。これはつまり、「地球上の寄生虫にすぎない人類が生物的に地球上に永存してみたとして、つまらぬことではないか」というふうな現象面だけに着目する考え方に対する彼の批判であろう。この論者の見のがしている「人間の内奥の本質」こそは、彼によればつぎのようなものである。

『しかし、この内奥の本質こそ正しくわれら自身の意識の中核としてその根底にあるものであり、したがって、この自意識よりも一層直接なものである。また物自体としてのこの本質は個体化の原理（時間と空間）を離れているから、個体は同時に併存しようとも、前後して存在しようともそれに関係なく、一切の個体に存在して本来同一のものである。これがすなわち「生きんとする意志」であり、したがって生命と永存とを切実に要求するものなのである。したがって、これは死の運命を免れており、死に煩らわされずにいる。しかし、それは現在の状態よりもまさった状態に達することは出来ない。したがって「生きんとする意志」には生命があるとともに、個体には絶えざる苦惱と死滅の繰り返しがあるのも間違いない。』

次節に述べる彼の恋愛論の結語（人間が恋を内密にする理由）を理解する基礎知識としては、以上の敘述の中から、つぎの二つが必要とされるであろう。第一は、物自体は彼によれば盲目的生存意志であり、すなわち宇宙（世界）の根底はこの意志であって、人間においてもこの盲目的生存意志がその根底となっているから、常に欲求に動かされ常に缺乏・不満を持つ。故に人生は苦である。第二は、物自体としての意志は個体化の原理を離れているから、本来一であり、永遠の形而上的実在であるとしても、個体（個人）は時間・空間という個体化原理を介して現われた仮現にすぎないから、死滅の運命にあるということである。以上の第一・第二を総合し、平易に要約すれば、純粹に何の下心もなく人生を眺めるとき、「人生とは苦しんで死んで行くだけのものである」（厭世觀）ということになるであろう。

つぎは、この人生苦よりの解放・解脱への道であって、その敘述はつぎの通りである。

『この苦悩と死滅から解放されるためには、生きんとする意志フェルトイムクの否定が保留されてある。この否定によって個体であるかについては、われらの概念を絶ってあり、またその概念構成の資料もない。それは「生きんとする意志」であろうか、あるまいかの自由を持つものどしとか、われらには言い表わすことが出来ない。後の場合すなわち「生きんとする意志」の否定の場合は、仏教では「涅槃ねはん」註二という言葉で言い表わしている。それは、人間の一切エルケントニスの認識が、認識として永遠に到達し得ない点である——』

ショーペンハウエルが説いた、人生苦より解脱する二つの道は著名である。その一つはここで述べていないが、芸術的解脱と言われるものである。その哲学的根拠註三については恋愛論とは直接の関係がないので省略するが、筆者の見解によれば、それを一つの思想傾向として見るとき、芸術に限らず学問も宗教もその他文化と称する一切のものから、趣味や娯楽や遊戯やその他一切の人間の営みは、意識すると否とを問わず、要するに人生苦よりの解放の手段と

して、人間が編み出し、でっち上げたものにすぎないのである。

この芸術的解脱は人生苦より解放して呉れるという意味において貴重なものではあるが、その解放は一時的にすぎない。恒常的な解脱は、彼によれば右のところでは述べているように、生存意志フェルナイヌンクの否定によって得られる。そのことの可能性・根拠・重要性などについては、別の箇所(註四)で正面から大いに論じているのであるが、この恋愛論は各論的部
分であるので当然省略されたのだと思う。しかし、本論の読者はその箇所を未だ読んでおられない方が多いと思われるので、次節(人間が恋を内密にする理由)を理解する限りに必要と思われる面だけを、適宜抜萃・要約してつぎに述べておきたい。

まず、これは「人間の救い」(英語のいわゆる final emancipation)という人間の窮極の理想であるので、彼も「救いを約束しない哲学は哲学の名に値せず」とばかりに、自分の哲学の立場から、相当のスペースを割いて縷々力説していることである。つまり、彼の哲学は単なる厭世哲学ではなく、救いの哲学であることの強調であると言えよう。第二に、彼は婆羅門教・仏教・基督教についての該博な知識を駆使して、それらの諸宗教も自分の哲学も、それぞれ表現は違っても、結局は同一の真理を説いているという宗教哲学的立場に立っていることである。それは、それらの諸宗教において救われた者の状態が何れも同様であることからも理解されるという。つぎは、救いの可能性を単に哲学的・思弁的に説くだけでなく、歴史に現われた救われた人(聖者)の実例を豊富に挙げ、救われてゆく現実の経路についても詳説していることである。つぎは、救われた者の平安・喜悅・高貴性などを到るところで強調していることである。

(註一) Eduard Grisebach, op. Cit., Bd. I, S. 1358 ff.

(註二) Nirwana. この語源に関する諸学説については、主著第四巻の補説第四十一章「死及び死と人間の本性それ自身の不滅性との関係について」の最後の註解に述べられている。

(註三) 主著第三卷が大体、芸術論で、その中の第三十五章が芸術的觀照の哲學的意義を論じている。なお、第三卷の補説第三十四章以下にも芸術論がある。

(註四) 主著第四卷第六十六章以下及び第四卷補説第四十八章・第四十九章の辺りがその主要な箇所である。

二一八 (註二)

本節の主題はすでに述べたように、「人間が恋を内密にする理由」の解釈である。鬼俗の語を用いれば、前段は人間社会の欲(苦)の面、後段は色の面についてのショーペンハウエル独特の高踏的・諷刺的描写である。本節の主題は後段に關連して述べられている。ここは彼の恋愛論の芸術的終局でもあるので、その全文を左に掲げる。

『さて、われらが、この最後の觀察点から人生の衽めき合いの有様を眺めると、すべての人が人生の困窮ノットと心労ブラーグに煩らわされ、果てしない欲求を充たそうとして、また種々様々の苦惱を防ぐうとして全力を尽してはいるが、しかしこの苦勞にみちた個人としての生存を束の間だけ維持して行くことの外は、敢えて何も期待してはいないのが、目にうつる。しかしまた、このごった返しがえの真只中で、相愛の二人の眼つきが慕わしげに交かわされるさまも、われらの眼にうつって来る、——だが、なぜあんなに、こっそりと・おずおずと・人眼を避けて眼差しまなざしを交かわすのであろうか?——そのわけは、これら相愛の二人は、もしそうしなければ間もなく終局に到るべきすべての困窮と苦勞とをわざわざ永遠に伝えようと私かにたくらむ反逆者であるからで、彼等の祖先が恋人としてなした通りに、彼等もまたこの困窮と苦勞とを終局させまいと欲するものだからである。』

右の反逆者(Veräter)とは、意識的ではなくとも、結果において反逆行爲をする者という意味であらう。人間が恋を内密にする現象は、彼が生きた前世紀の西欧社会に限らず、日本でも昔は「鎮守の森影に恋を囁ささやく」に、今は「広い東京恋ゆえ狭い」によく現われているし、東西古今を問わない普遍的な現象形態として何人も認めるところで

あろう。さて、その根拠が問題なのだが、彼の右の引用文の敘述を形式的に整備すれば、つぎのようになるであろう。内密にするのは恋は善くないことだからであり、何故善くないかはそれが性交の前奏曲だからであり、性交が何故善くないかはそれが人生苦の永続の原因たる行為だからである。この論理が成立するためには、人生苦を悪なるものとする価値判断が前提とされなければならない。ところが人生における苦難の意義・効果を説いた宗教家・哲人・思想家・教育者は古来数限りない程であることは、周知の通りである。事実シヨペンハウエルも前述の人間の「救い」を説く箇所(註三)において、苦難の浄化力・聖化力を力説しているのである。しかし、それらにおいてはすべて、苦難の体験によって得られるものが高貴なのであって、「苦」そのものは生命とか生命力とかにあっては、飽くまでマイナス的(悪)なものとなさなければならないであろう。であるから、「人生苦よりの解放」ということが、宗教的にも哲学的にもまた世俗社会においても、最大の関心事となるわけなのである。(凡人が苦難を避けようとして小さい智慧を用いる理由もここにある。)そこで童貞を守ることによって、すなわち子供を生まないことによって、人生苦を根源的に断絶する方法があるのに、恋の道に走る者はその道に足をそむける者だから悪だ、という論法なのである。

しかし、彼がこのような廻りくどい論法をとったことには疑問がある。というのは、前節の最後は一言で言えば、「人間には救いの道が立派に約束されている」ということであつたし、そこにつながって本節が来るのだから、「恋の道」に走ることは人間の窮極の理想である「救の道」に足をそむけることだから悪い、と結論すれば簡明であると考えられるからである。なぜならば、シヨペンハウエルにおいては、「生存意志の否定」すなわち「救の道」には、必ず禁欲(童貞・清貧)が伴なうのであって「救の道」と「恋の道」は絶対に両立しないからである。結局、生れて来て救われるよりも初めから生れて来ない方が、より根本的な絶対的解決方法だ、というのであろうか。(註四)

何れにしても、恋愛の価値判断は性交の価値判断につながる。あるいは両者は同一の基準から価値批判されるべきも

のと言えよう。そこで価値判断の基準が問題となるが、ここでは、人生の最高目的すなわち最高価値は「救われること」として、この基準から善（積極的価値）悪（消極的価値）の価値批判をすることになる。これについては前述のように、別の箇所でも正面から大いに論じているが、彼の結論だけを言うならば、前述のように恋愛（性交）を悪だとしてゐる。さて、恋愛（性交）を悪だとする彼の結論に対して、読者の中には、それはひねくれた暗い人生観だ、と軽く割り切つて片付けてしまふ方もあるかと思う。しかし、いやしくも人生を純粹に眞面目に習俗を離れて考える人にとっては、彼の結論が正当派のように思われるので、それを示唆する事柄を以下思いつきそのまま書き並べて、シヨペンハウエル『恋愛の形而上学』の研究を終わることとする。

まず、英語の童貞（Chastity）の語源であるラテン語（Castus）は清潔・純粹の意であるし、独逸語の清純（Reinheit）は同時に童貞を意味する。「情純」は通常価値判断的に望ましいとされているから、童貞にもそうした価値観が盛られていると言えよう。なお、新約聖書ヨハネ黙示録第十四章四節にも、「彼らは、女にふれたことのない者である。彼等は純潔な者である。」とある。日本の「処女の誇りを奪われる」という表現の背後にも、童貞の価値観が盛られている。

周知のように、性欲的なものが宗教・芸術・学問などの領域における活動に向けられ用いられることを昇華（Sublimierung・英 Sublimation）と言ひ、これは一般に望ましいものとされている。

プラトンは『理想国』^{ポリテイア}の初めのところでケパロスをして、性欲の悪魔性・狂暴性とそれから解放された老年の幸福とを語らせてゐる。シヨペンハウエルもそれを引用して、簡潔な哲学者らしいつぎの表現に要約してゐる。「老年は、それまで私たちを絶えず落ち着かせなかつた性欲からとうとう脱けきたということだけでも、幸福である。」。実際ドイツでは、性欲が枯れてから死床に横たわるまでの期間は、生涯の「^{デ・ベスト・ヤール}最良の数年」と言われているらしい。これは、人生を眞面目に考えた人の到達点であり、「救い」・「平安」・「幸福」は高い意味において同一物であることを

想うとき、それに対する色欲のマイナス的価値は否定せらるべくもない。

基督教界においても、性交（結婚の場合をも含めて）は罪悪かについて、初代教会以来西派に分れて論議されて来たようであるが、^(註六) もしすべての人が純潔を守ったら全人類は地上から絶滅するであろう、という反対論に対して答えた聖アウグスティヌスの著名な言葉はつぎの通りである、「彼等若き者は^{わか}呔^{つぶ}きて言はん。——若し凡ての人が一切の性交を禁ぜんとしたらんには、人類は如何にして存続すべきか？」と。——ああ、凡ての人が斯く決心せんこそよきにあらずや！ さらば、人はただ^{きよ}淨^{きよ}き心、良き良心、偽りなき信を以て愛の中に居り、神の国は一層速かに成就し、世の終りは早めらるべけん。^(註七)」

同様の思想の流れに属するものとして、またショーペンハウエルが再三説いた恋愛の欺瞞性を傍証するものとして、ラテン語につき名の著名な表現がある。

Omne animal post coitum triste.

あらゆる動物は性交のあとにはみじめなものだ。

右のラテン語の翻訳と思われる英語のものには、つぎの通り尾鰭がついて余韻をたたえている。

All animals are sad after the sexual act, except the cock who crows. ^(註八)

あらゆる動物は性交のあとには物淋しいものだ、時をつくる雄鶏だけは別だが。

昭和の初頃「坂田山心中」という、うら若い男女の情死事件があったが、その際二人とも童貞であったという証言が医師の口から出た時に俄然世人の耳目を聳動し、それが映画化されて「天国に結ぶ恋」となって人気を博したばかりでなく、その映画主題歌も全国的に歌われたことがあった。これは、恋愛の悪徳性が問題となるのは、それが性交の前奏曲であるからであり、恋愛そのものには少しの悪徳性もないことを如実に示すものであり、また自然秩序における恋愛・性交の連結を遮断した人間の自由意志の偉大さを実証したものとも言えようが、ここで何よりも重要なこ

とは、純潔を高嶺の花として讚美する素地が大衆の心の中にも用意されていることの実証があつたということである。(註九)註七

(註一) Eduard Grisebach, op. cit., Bd. I, S. 1360.

(註二) 本論集五八頁(註四)。その中で、苦難と救いと関係については、特に主著第四卷補説第四十八章「生きんとする意志の否定に関する説について」・同第四十九章「救いの道」で説かれている。なお、第四十八章の最後には、ドイツ神秘主義の父マイステル・エックハルト(Meister Eckhard)の古典的な・肯綮にあたるつぎの言葉が引用されている。

「汝等を完全の境地に運んで行く最速の動物、それは苦悩である。」

“Das schnellste Thier, das auch trägt zur Vollkommenheit, das ist Leiden.”

(註三) この場合、仮りに人生の「苦」と「楽」とを差し引き勘定出来るとして、楽の方がプラスになるのに、子供を生まないという人生苦の断絶方法は同時に人生楽の断絶ともなるから善くないという解釈はシェーペンハウエルにおいては認められない。彼においては、楽は苦をまぎらわしたり、ごまかしたりする一時的方便にすぎないからである。(本論、五六―七頁参照)

(註四) 「救いの道」は与えられているといつても、それは難行苦行の茨の道である。古来数々の聖者が輩出したとしても、完全に救われたものは一人もなかったと言つても差支えあるまい。「苦」を全く伴わない永遠の生命力としてならば兎も角、こんな人生なら結局生れてこない方が得たというのであろう。同様の思想は他にもあり、例えば旧約聖書・伝道の書の第七章一節には「死ぬる日は生るる日にまさる。」とあり、同書の第四章の二、三節にも、生存者より死者の方が幸福であり、この兩者よりも未だ生れてこない者が幸福だ、と述べられている。またスペインの劇作家カルデロン(Calderon)は、「人間の最大の罪は、彼が生れ出たということである。」と述べた。(Eduard Grisebach, op. cit., Bd. I, S. 1410.)

(註五) 青木巖訳『理想國』思索社、昭和二三年、一五―一六頁。

(註六) 例えば、結婚の悪徳性を主張し、「精神的な妻」スピリチュアル・ワイフ(床入りされてはならない結婚)の発行を奨励したエンクラティア党

(Enclariates) と呼ばれた初代教派もあつた。(John Langdon-Davies, A Short History of Women, p. 133.)

(註七) Eduard Grisebach, op. cit., S. 1428.

増富平藏訳、『宇宙及人生』下巻、玄黄社、大正十四年、四四八頁。

(註八) John Langdon-Davies, op. cit., p. 67.

(註九) 色欲の悪魔性が肯定されたからといって、そこから当然に結婚の悪徳性^{ウイックドネス}が結論されたり、またはそれが結婚の神聖と矛盾するわけのものではない。例えば、この間の消息についての藤井武氏の見解はつぎの如くである。「まことにアウガスチンの言うとおりに、色欲の充実は意思の降服である。人格の自己抛棄である。誰かこれを結婚のために弁護し得ようか。むしろ眼なく祝福せられたる人格的結合の尊厳を汚すものこそ、この没人格的奴隸的感動ではないか。結婚における色欲は実に蕃薇の花床における有毒の毛虫である。」(藤井武全集第八巻、「女に汚されぬ潔き者」藤井武全集刊行会、昭和六年、二三三頁。)

(註十) なお、ショーペンハウエルにおいては、人間が性器や性行為を人の目から遮断することの根拠も、恋愛の場合と同じ範疇で論ぜられている(この「恋愛の形而上学」につづく第四十五章において)ことを付言しておく。

Katsuo, Ishizuka

A Study of Schopenhauer's "Metaphysics of the Sexual Love" (IV)

Résumé

The subjects which Schopenhauer states here are as follows:

1. The various phases of unhappy life of the two lovers in satisfied sexual love.
2. The intense grief of the rejected lover.
3. The intrinsic nature of the god of sexual love, Cupid, the genius of human species.
4. The grief of disillusionment of both lovers after getting the sexual union.
5. The possibility of conquering the sexual passion with this metaphysical knowledge of the sexual love, above stated.
6. Happiness and unhappiness in the married life of various types in this world.
7. The metaphysical coupling of this metaphysics of the sexual love and his metaphysics at large.
8. The metaphysical background of the social convention that the sexual love is generally kept secret between the two lovers.